

レバンガ北海道のホーム戦が、 花川病院の冠試合として開催されました

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



2026年4月25日(土)、北海きたえーるにて、健育会グループ・花川病院が冠提供を務める「レバンガ北海道 VS群馬クレインサンダース」の試合が行われました。

2026年4月25日(土)、札幌・北海きたえーるにて、「医療法人喬成会 花川病院PRESENTS レバンガ北海道 VS群馬クレインサンダース」の試合が、健育会グループ・花川病院の冠スポンサーのもと、行われました。花川病院がB.LEAGUE（ジャパン・プロフェッショナル・バスケットボールリーグ）に所属するレバンガ北海道のスポンサーとなってから、そして折茂武彦代表と絆を育んできてから、早いもので15年が経ちます。



当日は折茂代表から、現役時代に背負ってこられた永久欠番である背番号「9」と、私の名前が入った世界でひとつだけの特別なユニフォームを、サプライズでプレゼントしていただきました。



オープニングセレモニーの始球式では、いただいたユニフォームを身につけ、折茂代表にサポートいただきながらフリースローを行い、華やかに試合の幕開けを飾ることができました。



レバンガ北海道の本拠地である北海きたえーるは、老若男女を問わず多くのファンで埋め尽くされ、会場全体が熱気に満ちあふれていました。

ファンの方々は、レバンガ北海道のチームカラーであるグリーンのユニフォームを身にまとい、ペンライトやタオルを掲げ、力強い声援と手拍子で大きな一体感を生み出していました。

その熱狂的な声援に応えるように選手たちも一心に戦い、試合は一進一退の白熱した展開となりました。



ハーフタイムには、私と折茂代表によるトークショーが行われました。司会の箕輪直人さんから、私と折茂代表との出会いについて質問をいただき、当時のエピソードをお話しました。



花川病院の運営が活発的になる中で、なにか地域のためにできることはないかと模索していた際、偶然折茂代表を特集をしている番組を目にしたことをお話しました。

2011年当時、折茂代表は現役選手として第一線で活躍しながら、社長として経営業務も担っており、懸命にトレーニングに励みながら、経営者として立ち振る舞っている、そのひたむきな姿に胸を打たれたこと。また、東日本大震災の際に北海道の皆さんから大変厚い支援をいただいていたこともあり「北海道に恩返しをしたい」という思いから、すぐに折茂代表に連絡を取らせていただいた、という経緯をお話しました。



折茂代表は、レバンガ北海道の知名度もまだ低く、スポンサー企業の獲得に難航し、資本金集めに悩まされていた当時、私からの突然の連絡に「こんなに面白い話があるわけがない。騙されているのではないだろうか」と感じたそうです。

司会の箕輪さんは、「もし折茂代表の特別番組を見ていなければ、お二人は出会っていなかった」という奇跡的な縁に触れ、15年間応援され続けていることに対してどのような思いを抱いているか、折茂代表に問いかけました。

折茂代表は、「苦しい時代から支えてくださった竹川会長(理事長)には感謝の念しかありません」と答え、2011年から現在まで継続してスポンサーを務めているのは花川病院だけである、という事実を明かされました。



15年間ユニフォームの背中で輝き続けた「花川病院」の文字は、折茂代表にとっても非常に思い入れの深いもので、ポスター撮影などの際には、「花川病院」の文字がしっかり見えるよう、あえて背中を向け、後ろから振り返るようなポーズを意識していた、という秘話も披露してくださいました。

折茂代表は、ホームである北海道の試合に私が初めて訪れたことに感慨深さと喜びを感じながら、過去に私が観戦した試合についても触れられました。

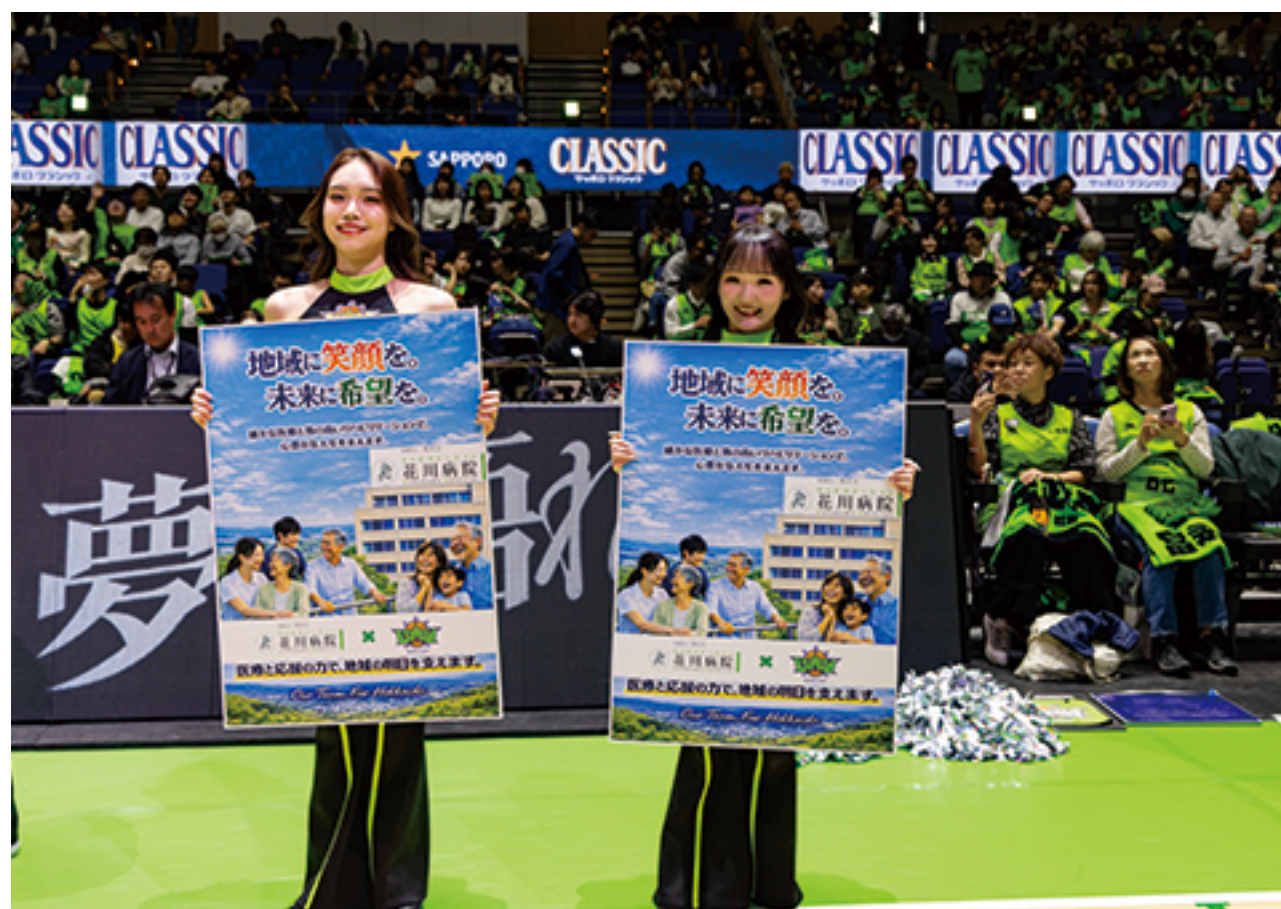
折茂代表は、「現役時代、竹川会長(理事長)が観戦に訪れると緊張してしまい、思うようにプレーができず、良いところをお見せできなかった」と冗談を交え、会場の笑いを誘っていました。



その後、司会の箕輪さんから、15年間レバンガ北海道を応援し続けてきた理由や、今回の試合のキャッチコピーである「地域に笑顔。未来に希望。」に込めた想いについて尋ねられました。

私は、折茂代表をはじめとするレバンガ北海道の選手たちの、試合を通じて北海道を盛り上げたいという熱意や、地域に対する愛に強く惹かれていることをお伝えしました。

そして、不安定な世界情勢や少子化問題など、多くの課題を抱える現代の日本において、未来への希望を持って生きていくことこそが最も必要であると考え、このキャッチコピーを掲げたという想いを述べました。



また、レバンガ北海道の選手の皆さんが「敬老会」に参加してくださっていることや、花川病院の夏祭りでは選手が直々に地域の子もたちにバスケットボールを教えてくださいななど、まさに地域を笑顔にする取り組みを形にしていることをお伝えしました。

さらに、健育会グループの新社員研修の際には、医療・介護のプロである意識を育む上でどのような心構えが必要か、本物のプロである折茂代表から自身の体験に基づく「プロフェッショナルの極意」について、ご講演をいただき、若い世代が未来に希望を持てるようなサポートをしてもらっていることも併せてお話ししました。



厳しい時代を経て15年、レバンガ北海道は多くの方々から応援される、北海道を代表する大きなチームへと成長しました。

スポーツとは、地域に対する愛があるチームが強くなっていくものです。多くのファンからの熱い応援を胸に、後半戦も勝利を目指して頑張りたいという激励の言葉を送り、トークショーは締めくくられました。



後半戦では、相手チームの猛攻に押される場面もあり、惜しくもレバンガ北海道は勝利を逃してしまいました。しかし、ファンの方々最後まで勝利の希望を捨てず、「ガンバレ」と熱い声援を送り続けました。選手の皆さんもその声に応えるように、最後まで懸命にボールを追い、「全“緑”」で挑み続けていました。

試合終了後には、医療法人喬成会 花川病院の生駒一憲院長より、本日の試合で目覚ましい活躍を見せた富永啓生選手へ「花川病院賞」が贈呈されました。



スポーツと医療、分野は違くとも、地域を支え続け、人々を笑顔にするという想いは同じです。

レバンガ北海道が2025-26シーズンに掲げているスローガン「Far, Together」は、チームやフロントオフィスのスタッフ一人ひとりが自らの役割を全力で全うし、ファンの方々も含めた全員が力をひとつにして歩んでいくという決意が込められています。

私たち健育会グループも、全ての職員が「Our Team」の精神のもと、それぞれの強みを活かし、互いに協力しながら日々の業務に打ち込んでいます。チームの力は組織としての成長を促すだけでなく、地域の方々や患者さん、ご利用者に「幸せホルモン」が溢れるような、心安らぐ笑顔に満ちた環境を創り出すと信じています。

私たちも、レバンガ北海道の皆さんのように努力を惜しまず、団結力を高め、最高のパフォーマンスを発揮できるよう、これからも邁進していきたいと思えます。

